『今昔物語集』の読み替え（下）

――三宝感応要略録との関連において――

宮田　尚

1

前編では『三宝感応要略録』の目録標題と本文標題とに違いのあるものを取りあげて、『今昔物語集』の対応の状況を観察した。

目録標題と本文標題とは、本来同一であるはずであろう。ところが『三宝感応要略録』には、数はわずかだけれども、両標題に違いのあるものがある。それも、書写の過程で生じる類の単純な差異ではなくて、はなしの内容に踏み込んだ、おそらくは標題策定時の解釈のゆれにもとづいたとみられる、いわゆる本格的な齟齬の例がみとめられるのだ。

『今昔物語集』にとって『三宝感応要略録』は、単なる素材源ではなかった。『今昔物語集』はそこから大量の素材を導入しただけでなく、説話配列の方法や標題の形式など、おおくのことを学び取っている。『今昔物語集』にとって『三宝感応要略録』は、かけがえのない先達であり、〈参考資料〉であった。

それだけに、『今昔物語集』研究の立場からすれば、『三宝感応要略録』のかかわる事象は留意を要する。たとえささいな事柄であっても、見過ごすわけにはいかない。試行錯誤の痕跡にほかならないであろう両標題の齟齬も、そうしたもののうちのひとつだ。

とりわけこれらは、例外的な存在である分、尋常な個所からでは得られない情報をふくんでいる可能性がある。『今昔物語集』ははたして、『三宝感応要略録』の混乱をどのように受けとめているのか。そしてそれは、『今昔物語集』にとってどのような意味をもつものなのか。

前篇でふれた観察の結果を要約すると、およそ次のようになる。

①『今昔物語集』は、『三宝感応要略録』の目録標題と本文標題との、両方を参照しているとみられること。

②『今昔物語集』は、二者択一でいずれかの一方を採用するという方法によらず、両標題を勘案したうえで、独自の標題を策定しようとしているとみられること。

③『今昔物語集』が独自の標題を目ざしたのは、構築しようとするみずからの作品の精度を高めるためであったとみられること。

これは、わずかな事例のなかに求められる、しかも、かすかな手

がかりをもとにした見通しだ。いまひとつ、決定力を欠くことはいなめない。しかし、例証に徴するかぎり、このような理解に落着かざるをえない。

③については、すでに別稿でふれたことがある。(注1) これはかならずしも、両標題の齟齬するものからでなくてもいいうる。ところが①、②は、両標題の齟齬するものからでなければ見えてこない情報だ。そしてこれが、既知の③と矛盾することなく連動するところに意味がある。

『三宝感応要略録』への依存ぶりというべきか、傾倒ぶりというべきか、ともあれ、よきにつけあしきにつけ、それを参考にしようとする『今昔物語集』の姿勢には、なみなみならないものがあったようだ。『三宝感応要略録』の手の内を知りつくす。おそらくこれは、前例のない壮大な構想にもとづく作品を編もうとする『今昔物語集』の編者が、みずからのたどるべき進路を見さだめるために、まず、自分自身に課した基本的な課題のひとつだったのだろう。

2

『今昔物語集』がいかに『三宝感応要略録』を頼りにしていたかは、本文などからだけでなく、標題の類似状況からも確認することができる。

『今昔物語集』の各話に付されている標題が、人間を中心にすえ、主述の形式で構成されていること、そしてそれが、『三宝感応要略録』を手本として発想されたものであること等については、すでに別稿でふれた。(注2) 『今昔物語集』と『三宝感応要略録』との標題の、ほぼ一致する具体例も、そこで指摘した。したがって今さらめくが、『今昔物語集』の読み替えをいうには、やはり前提として、まず不即不離の関係にあることを確認しておく必要がある。前稿とは別の例をあげる。

六39　震旦法祖於閻魔王宮講楞厳経語
中21　法祖法師為閻羅王講首楞厳経感応

六47　震旦張李通書写薬師経延命語
中33　唐張李通書写薬師経延寿感応

六48　震旦童児聞寿命経延命語
中37　童児聞寿命経延寿感応

両者は、まったく同一というわけにはいかない。六39を例にとっていえば、法祖が経を講じた点について、『三宝感応要略録』は閻魔王のため（為閻羅王）であったと、その目的を示している。それに対して『今昔物語集』は、閻魔王宮においてであった（於閻魔王宮）と、その場所で示している。

また、閻羅王、閻魔王と、その呼称にも違いがみられる。これは『三宝感応要略録』が二種の呼称を併用しているのを、『今昔物語集』が閻魔王に統一したことによって生じたものだ。とりたてて問題にしなければならない違いではないが、違っていることはたしかだ。

しかし、こうした違いはあるけれども、形態上、両者がきわめて近しい関係にあることは、一見してあきらかだろう。

右にあげた三話は、いずれもはなしが短かく、内容も単純だ。したがって、『三宝感応要略録』に依存しなくても、この程度の重な

りは生じるようにも見える。

しかし、何々のこと、あるいは誰々のこと、などという標題ならともかく、主述の体裁をとるばあいは、かならずしもそうはいかない。このことはたとえば、『三国伝記』の標題と重ねあわせるとき、かなりはっきりする。

『三国伝記』は、すでに指摘されているように、『三宝感応要略録』を資料として多用している。『今昔物語集』をふくむ三書で重複するものもおおいが、『今昔物語集』に類話の求められないものも少なくない。『今昔物語集』とは無関係に、『三国伝記』は『三宝感応要略録』に直接しているのだ。そして、『三国伝記』の各話にも、標題が付されている。

右に例示した三話のうち、六39は『三国伝記』に類話がない。他の二話の標題は、『三国伝記』ではそれぞれつぎのようになっている。

六47　唐張李返書写薬師経延寿事（記・五23）

六48　聞寿命経延命事（記・九26）

六47の類話で人名が〈張李返〉となっているのは、誤写、あるいは誤読による単純な差異だ。これは誤差の許容範囲にあり、『三宝感応要略録』『今昔物語集』『三国伝記』の三者は一致しているとみてよい。

ところが六48のばあいは、そうはいかない。主語としての〈童児〉が欠脱しているだけのようにみえるが、主述の形式へのこだわりの有無に起因する差であり、この違いは見かけより根が深い。

総じて、『三国伝記』の標題には方向性が稀薄だ。別の言い方をすれば、意識的なものだとはいいがたい。右の五23のように、『三宝感応要略録』そのままのものがある一方に、「金剛智三蔵和上事」（九19）や「悟真寺沙門釈恵鏡事」（十14）などのような、古い型の標題が混用されている。標題の効用を計算したうえで、それを意識的に活用したとは、とうてい考えられないのだ。右の、六48の類話である『三国伝記』九26の標題も、かくべつのふくみもなく、ありていにいえば無造作に主部を排除して、述部だけを残したのであろう。あるいは、主人公が無名人であることも、なにほどか作用しているかもしれない。

いずれにしても、短いはなしであり、その内容が単純だからといって、標題がつねに重なりあうものでないことは、ここから察せられよう。標題が重なりあうためには、なによりもまず、編者の志向するところが通じあっていることが必要なのだ。

ところで、『三宝感応要略録』と『今昔物語集』との標題でほぼ一致するのは、全体としてはわずかだ。大部分は、基本的には『三宝感応要略録』のそれを踏襲したうえで、一部の文言を修正したり、把握の角度の変更を試みたりしている。

重要なのは、この、いわゆる『三宝感応要略録』ばなれの試みが、『今昔物語集』の主体的な判断にもとづく、意図的なものである点だ。標題の異同をとおして観察される『今昔物語集』の読み替えは、『三宝感応要略録』からの自立宣言だということもできるだろう。

3

別稿では『今昔物語集』の『三宝感応要略録』ばなれ現象を、形

式統一のための措置であり、より具体的には、隣接するはなしとの調和をはかったところの、二話一類の説話配列の原則を明確にするための措置であったと指摘した。

この解釈は主として、標題の述部の異同をふまえたものだ。『三宝感応要略録』がたとえば、免苦（上9）、救死（上6）、免罪（上26）、礼拝（上35）、排地獄（中6）、滅罪（中57）などと述部で表現している部分を、『今昔物語集』はいずれも〈得活〉に置きなおしている（六11・13・24・29・33・七9）。同様に、見浄土相（上7）、図写（上12）、除疾・救亡親（中20）と『三宝感応要略録』が表現している部分を、『今昔物語集』は〈生極楽〉に置きなおしている（六15・16・38）。三宝の感応を説くことに主眼をおく『三宝感応要略録』にあっては、述部は具体的であることが望ましい。『今昔物語集』とて具体的であることを望まないわけではないが、『今昔物語集』はそのことよりも、個々のはなしのばらつきを排除して、作品としての統一性と方向性を明確にすることの方に重きを置いたのだ。述部におけるこうした改変には、隣接するはなしとの調和をはかることが重要な契機になっている。そう解釈した。

『三宝感応要略録』の標題は、右に例示したように、基本的には主述の形式をとっている。しかし、『今昔物語集』ほどには徹底していない。一部には、述部のみで構成されているものもある。『今昔物語集』が典拠としているものについていえば、上29・32・33・35、中42・49・60・61などがそうだ。また、主述はそろっていても、主語が人間ではなく、仏・菩薩であるばあいもある（上17・18・27・29など）。

したがって、形式を重んじる『今昔物語集』としては、これらを取り込むばあい、主部のないものについてはこれを補い、仏・菩薩が主語であるものについては、可能なかぎり人間に置きなおすことになる。可能なかぎりというのは、鸚鵡（四36）や大魚（四37）などのように、人間以外のものに置きなおさざるをえなかった例や、孤山観音を白檀観音（四28）に置きなおした例などもあるからだ。

とまれ『今昔物語集』は、『三宝感応要略録』に導かれながら、しかし『三宝感応要略録』の不備をみずから論理で組み替えた。この組み替えをうながした論理が、隣接するはなしとの調和を柱とした形式の統一だと判断したのだ。

この解釈に誤りはない、と思う。

ただし、これではなお不十分だ。ここには読み替えの視点が欠落していた。読み替えの視点を導入しなければ、たとえば『三宝感応要略録』の〈誨示〉（下17）が〈渡天竺伝法帰来〉（六6）になっていたり、〈画釈迦像〉（目録標題では〈釈迦画像〉）が『今昔物語集』で〈詣仏所出家〉（一23）になっていることには説明がつかない。『今昔物語集』は、いわば守りの改変だけでなく、攻めの改変もおこなっているのだ。

具体的に見ていこう。

まずは一23のばあい。『三宝感応要略録』と『今昔物語集』との標題は、それぞれつぎのようになっている。

略 ┌ 影勝大王釈迦画像感応（目録標題）
　 └ ○○○○画釈迦○○○（本文標題）
今・仙道王詣仏所出家語

○印は共通する字句である。『三宝感応要略録』の目録標題と本文標題とには小異があるが、ここではかくべつ問題にするまでもあるまい。

ところが、『三宝感応要略録』と『今昔物語集』との標題は決定的に違う。標題からだけでは、両者が出典関係にあるとの判断はつかない。『三宝感応要略録』のいう影勝大王と、『今昔物語集』のいう仙道王とは別人だ。同一人物の異称ではない。

懸隔のはなはだしい標題と違い、はなしの本体は、文言の出入りはあるものの出典関係を認めうる。差異は、許容範囲にあるといってよい。

さて、あらましは、つぎのとおりだ。

天竺にふたつの国があった。それぞれの国王は、影勝と仙道という。両国は友好関係にあり、たがいに相手国にないものを贈りあっていた。

経済的に豊かな仙道王は、影勝王に金を贈った。影勝王は返礼として、畳を届けた。仙道王は今度は、五徳の甲を贈った。熱いとき着れば涼しく、刀も矢もものとはせず、光りかがやく甲である。高価な甲のお返しに当惑した影勝王は、相手側に仏教がないことに気付き、畳に釈迦の像を描いて贈った。

仙道王は、見なれない奇異なる釈迦の画像を見て怒り、これまでの友好関係を破棄して影勝王を攻め滅ぼそうとした。ところが、中天竺の商人たちはこの画像を見て、異口同音に南無仏陀と唱えた。

ことの重大さを悟り、恐れをなした仙道王は、国政を太子にゆだねて影勝王のもとを訪ね、釈迦に導かれて出家した。

要するにこのはなしには、影勝王と仙道王との、ふたりの王が登場する。そして、かれらのはなしのなかでの立場は、ほぼ対等だ。いずれを主役に見立てることも可能なのだ。

こうした状況のなかで『三宝感応要略録』は、影勝王を主役だとみなした。彼が釈迦像を描いたことが、このはなしのポイントだとみなしたわけだ。三宝の感応を説くことを旨とする『三宝感応要略録』としては、とうぜんのありようだ。

ところが『今昔物語集』は、このはなしを導入しながら、『三宝感応要略録』とは違って、仙道王を主役だと見たてなおした。

出家の契機をつくった影勝王から、彼の用意した枠組みの中で出家した仙道王へと、主役を変更したのだ。この措置によって、このはなしは画像の霊験譚から出家譚へと意匠を替えることになった。

いうまでもないことながら、この読み替えは、けっして恣意的になされているのではない。ましてや不用意さによってもたらされているのでもない。すぐれて意図的な配慮によるものだ。

この点は、『今昔物語集』における当該話の前後を一見すれば判然とする。本文標題を列記すると、つぎのとおり。

一17　仏迎羅睺羅令出家給語
一18　仏教化難陀令出家給語
一19　仏夷母憍曇弥出家語
一20　仏那輸多羅令出家語（欠話）
一21　阿那跋堤出家語
一22　鞞羅羨王子出家語
◎一23　仙道王詣仏所出家語

一24　郁伽長者詣仏所出家語（欠話）
一25　和羅多出家成仏弟子語
一26　歳至百廿始出家人語
一27　翁詣仏所出家語
一28　婆羅門依酔不意出家語

釈迦の息子である羅睺羅の出家にはじまって、釈迦の肉親、さらには異教徒たちにまでおよぶ一群の出家譚がここには配されている。仙道王の出家譚は、この一群の構成要素としての役割をはたしているのだ。影勝王を主人公とした画像の霊験譚では、とうていここに収めるわけにはいかない。

ちなみに、仙道王をあらたに主人公に見たてなおした一23の標題は、次話との調和がはかられていて、ともに〈詣仏所出家語〉である。

一24（次話）は、標題だけが記されている欠話だ。したがって、これの標題がはたして、話の本体を正確に体現しているのかどうかを確認することは、残念ながらできない。

しかし、一22（前話）をさらに重ねあわせると、この一群の出家譚の構成に、『今昔物語集』がいかにこだわっていたかが察せられる。一22の本文標題は、それ以前の数話との関連で〈出家語〉となっているけれども、目録標題はじつは〈一日出家生天上語〉となっている。本文標題と目録標題とは齟齬しているのだ。そしてはなしの本体は、天上への転生が中心である。つまり、目録標題の方がはなしの内容に忠実なのだ。

この事実は、『今昔物語集』が一22を転生譚から出家譚に読み替えるために、内容の体現という標題本来の目的を犠牲にして、目録標題の〈生天上〉を、あえて割愛したものであることを、まぎれもなく証している。

一23の前後に認められるこうした状況を、見過ごしてはなるまい。一23において、主人公を影勝王から仙道王に置き替えた、そのこと自体にはさして不自然さはないけれども、前後の状況を総合的に判断するならば、霊験譚から出家譚への読み替えを目論んだ、すぐれて意図的な措置であったと解釈せざるをえないであろう。

4

述部の変更による読み替えは、前後のはなしとの調和をはかった、微調整といったおもむきがある。

それに対して主部の変更は、全面的な模様替えだ。典拠の設定にとらわれることなく、視点や発想を転換して当該話にあらたな息吹きをあたえる。どのはなしにも適用できるわけではないけれども、適用可能なはなしに対しては、これはおおきな効果の期待できる有効な読み替え法だといってよいだろう。とうぜん『今昔物語集』の編者もこの辺には気付いていて、しばしばこの方法を用いている。

前編で取りあげた例でいえば、六9において主人公を玄宗皇帝から不空三蔵に置きなおしたのはそうだ。

ほかにもたとえば、虞安良本人から彼の兄に置き換えた六11、妻から夫の李大安に置き換えた六13、司馬の家室親属から司馬本人に置き換えた六21、則天皇后から義浄三蔵に置き換えた六42などがあ

る。これらの主部の変更は、いずれも述部の変更と連動している。

戒賢論師から玄奘三蔵に置き換えた六6は、主部の変更という点では同列だが、読み替えによって本卦帰りをしている点が他とは異なる。

六6は、玄奘の天竺留学エピソード集とでもいうべき性格のはなしだ。天竺への途次、観音の化身から般若心経を授かったこと、摩竭陀国の世无厭寺で、戒賢論師から仏法の伝授を受けたこと、仏跡巡礼の旅中に異教徒に捕らえられて殺されそうになったとき、逆に彼らを教化したこと、法文水没の危機に直面したとき、龍王と取り引きをして難からまぬかれたこと、などの諸段からこのはなしはなっている。典拠も一書ではなく、複数の文献からしかるべき個所を摘出して合成したものだ。

これら諸段のうち、当面問題になるのは、戒賢論師と玄奘との出会いの段だ。『三宝感応要略録』の側から点検していく。

『三宝感応要略録』下17に求められる類話には、つぎのような標題が付されている。

世无厭寺戒賢論師蒙三菩薩誨示感応

主部は、いうまでもなく戒賢論師である。彼が菩薩の誨示を受けたはなしだというのが、標題の示すところだ。標題では、玄奘は埒外に置かれている。

しかし、むろん、はなしの本体には玄奘は登場する。それどころか、狂言まわしの重要な役割をになっている。『三宝感応要略録』下17のあらましは、こうだ。

宿痾の苦しみに堪えかねて、断食による死を決意した戒賢論師の夢枕に、観音、弥勒、文殊の三菩薩がたった。そして誨示した。病苦は前世の悪業によるものであるゆえ、なすべきことは捨身ではなく、懺悔であり、弘法である。近く訪ねて来る震旦僧に正法を伝えるならば、都率天往生の所願も成就されるであろう、と。

三年後、夢告のとおりに玄奘が到来した。これは戒賢論師にとって、誨示の信ずべきことを証するものであった。感激した戒賢論師は、あたかも瓶の水を移すように、『瑜伽論』を中心とする仏法を玄奘に伝授したのであった。

『三宝感応要略録』下17は、戒賢論師に対する菩薩の誨示に焦点を合わせ、そのことを示す標題を付している。たしかに菩薩の誨示は、重要な要素ではある。しかし、忘れてならないのは玄奘の存在だ。玄奘を抜きにして、このはなしはなりたたない。

それもそのはずだ。じつはこのはなしは、もともと玄奘を柱にすえたものだった。

『三宝感応要略録』下17は、記されている注記によって、『慈恩伝』にもとづいたものであることが知られる。『慈恩伝』は、正確には『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』という。玄奘の伝記だ。伝記である以上、玄奘はとうぜん、どの局面にも直接間接かかわりをもつ。

どうやら『三宝感応要略録』下17は、菩薩の感応譚の収集をすすめるなかで『慈恩伝』にいきあたり、そこから採集されたものらしい。『三宝感応要略録』が『慈恩伝』を、みずからの論理で引き寄せたものだ、といいかえてもよい。下17は、そういった状況にある。

ところで、一方の『今昔物語集』六6の標題は、

玄奘三蔵渡天竺伝法帰来語

である。独立したはなしである『三宝感応要略録』下17と、複話構成の『今昔物語集』六6の標題とを単純に比較するわけにはいかないけれども、両者の立場はあきらかに異なる。『今昔物語集』は主役を玄奘に見たてなおして、玄奘による伝法譚のなかに組み込んでいる。

『今昔物語集』が玄奘を主役に見立てなおしたのは、もっぱら構成上の要請による。巻六冒頭の、三蔵による伝法譚の話群のなかにこれを位置させるためには、これは必要な措置であった。この措置は、仏教史的にも理にかなっている。それになによりも、玄奘を主体に解釈しなおすことは、このはなし本来の、あるべき姿に戻すことでもあった。六6のこの段の読み替えは、こうしてめでたく完成した。

しかし、ここで若干補足しておかなければならないことがある。『三宝感応要略録』下17からの読み替えというだけでは、『今昔物語集』六6の問題は、なお説明は不十分なのだ。そこには『慈恩伝』がからんでいる。

『三宝感応要略録』下17は、いまいうように『慈恩伝』にもとづいたものだ。そして『今昔物語集』六6の当該部分は、『三宝感応要略録』からではなく、じつは、『慈恩伝』から引き出されたものだとみられる。

『三宝感応要略録』下17はむろん、無関係ではない。『今昔物語集』が『慈恩伝』に依拠するについては、それが一役買っている。

手順は、おそらくこうだ。『今昔物語集』はまず『三宝感応要略録』下17に接した。しかる後に、そこに記されている注記を手がかりにして、下17の典拠である『慈恩伝』をたぐり寄せ、これに依拠した。

一般論としていえば、親子関係にいることがあきらかな二書を前にしたとき、格別不都合な点がないかぎり、親たる文献にしたがうのが自然だろう。加えてこの両者には、玄奘の来訪を受けたとき、感激して啼泣したのを戒賢論師だとするのと、その弟子である覚賢法師だとするのとの違いがある。『今昔物語集』が、状況設定としても無理のない『慈恩伝』に依拠したのは、むしろとうぜんのなりゆきであった。

要するに、玄奘と戒賢論師との出会いの段における、主部の置き換えによる本卦帰りの手柄は、『三宝感応要略録』から『今昔物語集』への過程にあるのではなく、『三宝感応要略録』から『慈恩伝』へと遡及したところの、資料上の真面目さがもたらしたものだということになる。

5

思い描いた形状に仕上げるために、範と仰いだ『三宝感応要略録』さえも時に突き放し、自己を主張しようとした作品。これが『三宝感応要略録』と『今昔物語集』との、標題の観察をとおして眺められる『今昔物語集』の姿である。開拓者の不安と冷徹さを読み取るのは、思い入れがすぎようか。

注1　『今昔物語集震旦部考』（一九九二、勉誠社刊）六章二節
注2　同右